

プレス空知 2016年12月 深井尚子

12月は、クリスマスコンサートや歳末助け合いなどのチャリティコンサートなど、演奏会が多く行なわれますね。クリスマスの定番、チャイコフスキーの「胡桃割り人形」、年末恒例の、ベートーヴェンの「第9交響曲」について、今月はお話しましょう。

「胡桃割り人形」は、チャイコフスキーのバレエ音楽で、少女クララがクリスマスの夜に見た夢、という設定です。舞台上には、大きなクリスマスツリーが置かれます。そのため、クリスマスの時期には、この曲が大活躍します。金平糖の踊り、ロシアの踊りトレパーク、花のワルツなどは、たいへん有名で、夢があって、わくわくするような音楽になっています。この曲は、ピアノ独奏やピアノ連弾に編曲されていて、私も以前、演奏会で演奏したことがあります。1曲ずつ題名がついていて、その題名にぴったりの音楽がつけられています。1曲1曲が短いので、聴衆の方々も、題名と共に楽しむことのできる人気の高い曲集といえます。

さて、それに対して、ベートーヴェンの第9交響曲は、大勢の合唱団とともに、演奏時間70分を超える大曲です。「胡桃割り人形」のような情景を思い起こすことができ、クリスマスの夜、という限定された季節を表す音楽ではなく、第9は、ベートーヴェンの「人類はみな兄弟である。」という人間愛の象徴となっています。そのため、「欧州の歌」として欧州連合の象徴として、また、ベルリンの壁が崩壊し、ドイツが再び統一された時にも演奏され、ヨーロッパの統一の象徴にもなっています。年末に集中して演奏されるのは、日本独特の現象のようです。

第9は、ベートーヴェンの最晩年の1824年、54歳の時に作曲された、ベートーヴェン最後の交響曲です。ベートーヴェンは、ボンに住んでいた青年期から、シラーの文学に親しんでおり、22歳の時にすでにこの「歓喜に寄す」に曲をつけようと考えていました。ベートーヴェンは、長い間、1つのテーマやアイディアを暖めるタイプの作曲家で、それから32年の年月を経て、最後の交響曲の合唱の楽章の歌詞に採用しました。シラーの「歓喜に寄す」には、「すべての人々は兄弟になる。」「抱き合おう、諸人よ。この口づけを全世界に。」という歌詞が盛り込まれ、人類愛に満ち、愛と平和を詠っているのです。ベートーヴェンは、生涯、「愛」というテーマを持ち続け、また、憧れていました。ベートーヴェンは、1曲だけ、「フィデリオ」というオペラを書きましたが、そのテーマも「夫婦愛」でした。また、ベートーヴェンは生涯独身でしたが、いくつかの熱烈なラブレターが残されていて、人を愛することをいつも求めていました。また、あまり仲のよくなかった2人の兄弟にも、できる限りの援助をするなど、人類愛が彼の創作の背景にあったのだと思います。

第9の初演の際、正指揮者と共に舞台上上がり、テンポなどを指示したといわれていますが、演奏が終わったあとの、割れるような拍手が全く聴こえず、「マエストロ、聴衆をご覧下さい。」とまわりの音楽家たちに促がされ、やっと、初演の大成功を知ることができたといわれています。